

コンブ残さず有効利用

堆肥化、^{たいひ}順調に進む

村特産品の養殖コンブの根元や葉先など、商品として使用しなかった部分を使った堆肥造りが順調に進んでいます。村では平成15年6月に堆肥の試験生産を開始。完成した堆肥は、15、16年と和野山・黒崎地区のホウレンソウやニンジン栽培などに使ってきました。本年度も5月下旬から、約150トの栄養豊富なコンブの根元部分を使い生産を進めています。9月下旬には約110トの堆肥が完成し、村内での販売も予定しています。このコンブを使った堆肥化は、漁業系未利用資源の再利用化と農業振興とを併せて推進できる——と期待されています。

未利用資源を 再活用できないか模索

村の養殖コンブ漁は昭和41年、数戸の漁家が始めたことをきっかけに徐々に増え、現在では114戸の漁家で養殖コンブ漁を営んでいます。今では漁家の大切な収入源となり、昨年の養殖コンブの水揚げ量は4千443トで、すきコンブや長切りコンブ、刻みコンブなどの製品として

全国に出荷されています。コンブの製品になる部分



堆肥造りに利用される養殖コンブの根元部分

は、一枚のコンブが約4トだとすると約3トで、堅い根元の部分や葉先は製品に適さない部分です。平成13年度までの10年間平均で年間約1千900ト（湿重量）が発生していると予想されます。このコンブの根元など未利用資源は、ウニやアワビの増殖用の餌とされてきましたが、それ以外にも商品として再利用できないものかと、漁家や漁協、村などで考えていました。



養殖コンブの根元などを混ぜた堆肥の生産が順調に進む和野山地区の堆肥場